

三、淡水化

その後の様子は断片的には記録されたものがあるようですが、水質、漁獲物等を詳しく述べたものは見当りません。江戸時代に入ると霞ヶ浦の歴史の中で最大の変化がおこります。淡水化です。

昔の利根川は、江戸を通って東京湾に流入していましたが、江戸の町が、度々洪水に見舞われ、人々が困ったので治水工事を行い、今の水路にしたのだといわれています。人よんで「利根川の東遷」、ピラミッドの工事に匹敵するものとして、高く評価されてきたのですが最近種々の検討がなされ、異論がとなえられるようになって来ています。(利根川と淀川、中公新書、小出博著、思想と科学、八巻藤田至則著など)。これらによれば、東遷は最初から計画的おこなわれたものではなく、試行錯誤によつてなされたもので、とくに幕府が経済圏の拡大をねらつて、この地域に運河をつくりながら、産業基盤を充実させていったのではないかという見方がとられるようになって来ているようです。東遷が完成し、利根川が銚子に流れ出るのは一六五四年が定説となつていますが、淡水化は急激に進んだのではなく、かなりの年月を要したようです。また魚類もコイ、フナ、ワカサギが中心になり、江戸時代に製塩が浮島から姿を消したという

記録があり、地形的にも湖尻部が、利根川によつて運び込まれる土砂によつて埋められ現在の姿に近づきます。このような歴史を振りかえつて見ると、今なお教えられるところがあるようです。

四、現在

利根川によつて運び込まれる土砂によつて下流域が埋められ、淡水化が進むと同時に水はけが悪く洪水に悩まされます。今の東京水産大学によつて初めて湖水の分析が行われたことが茨城県水試報告に見られ、同水試の広範囲にわたる調査は貴重なものとなっております。これによれば、湖水の塩素量は桜川のそれとほぼ同じぐらい低く、現在よりも淡水化が進んでいたようです。明治四三年におこなわれたブランドンの調査では、すでにアオコが見られ、透明度も二メートルぐらいですから、この頃にも、富栄養化はかなり進んでいたと考えられます。水深も今より九〇センチメートルぐらい深く、ごくおおまかに云つて毎年一センチメートルぐらいずつ浅くなつて来ています。このような中で洪水防止を目的に下流域の浚渫が行われ水はけがよくなると同時に塩素量の増加が見られるようになり、昭和三〇年以後に下流域にヤマトシジミの漁場が出現します。これと同時に治水、利水を目的に常陸川水門が建設され湖水は近い将来、完全に